

早稲田大学大学院教育学研究科

博 士 論 文 概 要 書

否定表現を伴う副詞の日・韓対照研究

丁 允英

# 博士論文の概要書

氏名：丁 允英

## 1. 研究目的

本研究は、現代日本語の副詞で、「否定表現を伴う語」のうち、辞書類において、意味記述に互いの語がメタ言語として使用され類義関係にあると思われる語、また、韓国語に訳した場合、多様な対応関係をみせる類義関係にある副詞を選び、個別の意味と相互の意味の類似点及び相違点について記述し、さらに日本語と同じ現象が見られる韓国語の副詞について対照研究の立場から考察を行うものである。

語には通常、辞書の意味以外にも多くの意味が付随する。それらは文体上の特色、文法上の用法、使用者・対象の制限、文脈的意味、イメージ及ニュアンス、暗示されている心理などと呼ばれるものである。これらは話される度に異なり得るものである。またその言葉を受け取る人によっても異なり得る。

具体性をもつ名詞とは違って抽象的な意味を持つ副詞の場合、辞書を通して副詞の正確な意味や用法を把握することはたやすいことではない。例えば、日本語の副詞「なかなか」について、辞典および学習書において「①〈動詞否定形が後に来て〉実現するのに時間や手間がかかるようす。②（打ち消しや否定の意の表現を伴って）予想、期待されることが容場には実現しない現状を表わす。③（打ち消しの語を伴って）思ったとおりには。容易には。④（多くあとに打消しの語を伴って）容易に実現しないさま。⑤（否定の語を伴う）簡単には。すぐには。⑥事態が容易に成立しないさま。⑦（下に打消の語を伴って）容易には実現しないさま。簡単には。たやすくは。すぐには。⑧《多くはあとに打消しを伴って》そう簡単には。⑨実現までにまだ時間が掛かりそうなさま。その動詞の表わす事柄の実現にはまだかなり時間がかかる。つまり実現にはかなり困難が伴う。⑩物事の解決や目標達成に時間・労力や能力などを必要とする様子を表す。」などと記述されている。これらの記述は非常に抽象的である。一方、辞書類において「なかなか」に対応するとされる韓国語副詞「좀처럼 *jomcheoreom*」についても「도무지 *domuji* (全く)」、「애를 많이 써도 (非常に努力しても)」、「여간해서는 *yeoganhaeseoneun* (ちょっとやそとでは)」、「좀처럼 *jomcheoreom* (なかなか)」、「좀체 *jomche* (なかなか)」などと類義関係にある語が中心となっており、抽象的な語の意味が抽象的な語で記述されている。このような現象は、日韓辞書、韓日辞

書、翻訳書にも見られ、日本語学習者の副詞習得及び適格な使い分けの妨げとなっている。

また、「否定」も様々な理由で習得が難しいとされる表現である。その理由として、母語の干渉や「否定」という現象自体がもつ構文的・意味的に複雑な性格、日本語教育の現場で「否定」について「肯定+ナイ」という形式からだけ取り上げている点などがあげられる。

このような背景から、本研究では、日韓両言語における副詞のうち、否定表現と共起する副詞を中心に、意味・用法を考察し、両言語の対照を行い、その類似点及び相違点について明らかにする。

さらに、本研究の成果は、日本語と韓国語における対照研究だけでなく、韓国語を母語とする日本語学習者、日本語を母語とする韓国語学習者のため、すなわち、第二言語教育への貢献も期待することができる。

## 2. 論文の構成

本研究は全5章から構成されている。各章で行ったことを以下に示す。

第1章 研究目的、研究対象、研究方法

第2章 先行研究と本研究の立場

第3章 事実確認的否定副詞(不可能・程度)、遂行的否定副詞(不満足・意志)

第4章 辞書類・翻訳書における類義関係にある日韓否定副詞の対照

第5章 結論と課題及び展望

## 3. 各章における研究内容及び結果

### 3.1 第1章 研究目的、研究対象、研究方法

第1章では、まず、研究の背景として日本語学習者において「否定表現」と、「副詞」は、学習及び教えることの難しさが日本語教育の現場・辞書類・日本語教材などにおける扱いに起因していることについて述べた。

「否定表現」については、現代日本語における高い比重を占めている表現であるにもかかわらず、日本語教育の現場では、母語の干渉・否定表現自体が持つ構文的・意味的に複雑な性格などを考慮せず、「肯定文」に従属した形として扱われることが多いため、否定表

現の学習が難しくなっていることについて述べた。

「副詞」は、国語辞典のような日本語による辞書の場合、意味を抽象化したり、類義語で説明されていることと、日韓辞書・韓日辞書のような二つの言語を使う辞書の場合は、似た意味を持つ対訳語で説明しようとする傾向があるため学習が難しくなる。また、日本語副詞の指導も、韓国語副詞に対応する語の副詞が類似関係にあるにもかかわらず、それぞれ違った意味の幅を持っているため、使用場面によって、その意味が変わることが多く、辞書の意味だけでなく、文を通しての学習が必要であることについて述べた。特に、日本語の学習が進むにつれ、似通った表現が出てくるため、学習者は使い分けに苦勞することについて触れた。今回調査した日本語教科書 31 種 (49 冊) の内、本研究の考察対象とした副詞の現れ方は「あまり 29 種(22 冊で否定表現と共起) > とても 25 種(約 10 冊で否定表現と共起) > なかなか 22 種(約 18 冊で否定表現と共起) > ぜんぜん 22 種(約 16 冊で否定表現と共起) > どうしても 7 種(約 7 冊で否定表現と共起) > けっして 6 種 > どうてい 2 種 > 一向 1 種」のように、教科書によって、扱い方にばらつきが見られ、教科書において共通度が低かった。また、教科書での提出の仕方は初級レベルでは、副詞そのものの指導のため取り上げるわけではなく、初級で扱う文型や使用場面に付随して取り上げているのが現状のようである。

このような背景から、刊行された語彙調査資料と先行研究から副詞をリストアップし、語義説明や記述に「打消し」「否定」などということばが記されている語、すなわち、否定表現と共起する副詞を選び、韓国語に訳した場合、類義関係にあると認められる語を取り上げることにした。韓国語の副詞は、辞書や翻訳書などで日本語の副詞に対応している語を取り上げた。日韓両言語、それぞれの考察対象になる副詞は以下のものである。

**日本語の副詞：**(数字は収集した用例数)

あまり(598)、一向に(64)、けっして(285)、ぜんぜん(493)、ちっとも(96)、  
どうしても(268)、とても(770)、どうてい(45)、なかなか(399)

**韓国語の副詞：**

결코(190)、그다지(120)、도무지(101)、도저히(94)、별로(195)、  
発音：[gyeolko] [geudaji] [domuji] [dojeohi] [byeollo]  
逐語訳：(けっして) (あまり) (全く) (どうてい) (別に)  
아무래도(207)、전혀(343)、좀처럼(41)、  
発音：[amuraedo] [jeonhyeo] [jomcheoreom]  
逐語訳：(どうしても) (全然) (なかなか)

次に、研究方法については、従来の研究が作例によって論を進めることが多く、対照研究でも訳例の場合、執筆者の自ら翻訳したものがほとんどであったため、用例自体は客観性に欠け、論文全体にも影響を及ぼす恐れがある。そのため、副詞のデータは、日本語と韓国語で刊行された、シナリオ・ドラマ・戯曲や小説を用いる一方、話し言葉と書き言葉の文体による副詞の出現と用法の差を狭めるため、随筆、新聞(インターネット公開のものを使用)などの日韓・韓日翻訳書から用例を収集した。用例収集の際には、日本語原書と韓国語訳書(以下「J→K」と略す)、韓国語原書と日本語訳書(以下「K→J」と略す)の両方向の副詞と否定表現の用例採集を行い、考察の資料とした。

### 3. 2 第2章 先行研究と本研究の立場

第2章では、まず、辞典類や先行研究において「否定」とは何にかについて述べ、日韓両言語における「否定表現」と「否定表現を伴う副詞」について概観した。

「否定」の概念について、日韓両言語ともに、肯定の対として捉え「肯定」と「否定」について、対立関係・矛盾関係・反義関係にあるものとしている。言語学的においては「語、句、文の内容を否定する」と定義されるが、「打消し」とほぼ同義である。また、言語表現において、「肯定」と「否定」は全く同等の価値をもつものではなく、「否定」が表現主体の積極的な意図が加わったものとしてみることもできる。

「否定文」については、日本語の否定文は、形容詞「ない」と助動詞「ない」の二種類からなる。一方、韓国語の否定文は、否定辞「아니 ani/못 mot」を動詞の前に置いた短型否定であり、「지 ji」と「아니하다(안하다) (しない) /않다(anhada(anhada/anta) (しない)」と「못하다 motada (できない)」と結合した長型否定である。短型と長型の否定形式に分かれていることは韓国語否定法の特異性である。否定辞による否定表現の他に、非存在を表す「없다 eobsda(ない/いない)」による否定と、繫辞「이다 ida (である)」の否定語である「아니다 anida(～ではない)」による否定、「모르다 moreuda(知らない)」による否定、命令文に使われる「말다 malda(～することをやめる)」による否定文がある。また、「未-/非-/不-/無-」などの語彙否定もある。以上を簡単にまとめると〔表1〕のような対応関係をもつ。

〔表1〕日韓両言語における否定表現の現れ方

	日本語の否定表現	日本語に対応する韓国語の否定表現
否定辞による否定表現	名詞+ない	없다/eobs-da
	形容詞+(は)ない	안~/an~
		~지 않~/~ji-anh~
	形容動詞+ではない	못~/ mot~
		~지 못~/~ji- mot~
		안~/an~
	名詞(～ということ)+ではない	~지 않~/~ji-anh~
		아니다/a-ni-da
	動詞否定形(可能動詞を含む)	않~/ anh~
		~지 않~/~ji-anh~
못~/ mot~		
~지 못~/~ji- mot~		
		없다/eobs-da
命令(禁止)	～るな/～ないで	~지 말아라/tonji marara
否定語	分からない/知らない	모르다/mo-ru-da
不可能	～ということ(は)ない/～できない	~할 수 없다/hal-su-obs-da
否定接頭辞	無・非・不・未	無・非・不・未

さらに、日・韓両言語における否定表現と共起する否定対極表現には、次のようなものがある。とりたて詞は「しか/밖에 bakke」、1+助数詞+も(도 do)は「一つも、一人も、一回も、など/하나도 hanado、한 사람도 hansaramdo、한 번도 hanbeondo、など」、不定語+も(도 do)は、「誰も、何も、どこにも、など/아무도 amudo、아무 것도 amugeotdo、아무 데도 amudedo、など」、否定副詞「けっして、とうてい、ちっとも、など/좀처럼 jomcheoreom、など」

1) 舞 : これじゃ、何も伝わってこないでしょ。(shall)

마이: 이렇게 해서는 아무 것도 전달되지 않죠.

2) 一軒しかない駅前の蕎麦屋に入り、薄暗い隅の席に向かう。(柔らか)

한집밖에 없는역 앞의 국수집에 들어가 어두컴컴한 구석에 자리를 잡았다.

3) お嬢ちゃんの姿は一回も見たことありません。(柔らか)

따님 얼굴은 한번도 본 적도 없어요.

4) 達彦「被害者の遺族の気持ちを考えたら、決して重すぎる判決じゃない」(熱の島で)

다즈히꼬 : 피해자 유족들 심정을 생각하면 결코 무거운 판결은 아니야.

日韓両言語の先行研究において「否定副詞」について論じる場合、「強調(性)」「程度(性)」という二つの側面を共通してもっていることが分かった。

最後に「本研究における立場」では、考察対象とした副詞の共通する意味は「強調性」とし、Austin(1962)の言語行為理論を取り入れ、対象とした副詞が持つ意味により「事実確認的否定副詞」と「遂行的否定副詞」と二分し、さらに4つの類型に分類した。ただし、語によっては、各類型において連続性を持つものがあるとした。

### 3. 3 第3章 事実確認的否定副詞(不可能・程度)、遂行的否定副詞(不満足・意志)

第3章では、第一節で、副詞の持つ意味・用法によって4つの分類について詳しく述べた。

まず、「事実確認的否定副詞」は、現実の世界を記述したり、報告したりする場合に用いられるものとし、これをさらに「不可能」否定副詞と「程度」否定副詞に分けた。「不可能」否定副詞は、望みを叶うためには、話し手の能力や、話し手の外的条件によって望みが叶えないか、叶えることが難しい状況であることを表す。「不可能」否定副詞には、可能性の余地を残す「なかなか」と可能性がゼロであることを表す「ぜんぜん／とうてい」を分類した。「程度」否定副詞は、文が表す否定の程度を強化または弱化させて記述したり、報告したりするものである。「程度」否定副詞には、肯定の余地を残さず、否定の程度を強化させる「強い程度」を表す副詞「ぜんぜん／ちっとも／一向」などと、否定的な意味を弱化させる「弱い程度」を表す副詞「あまり／別に」などを分類した。

次に、「遂行的否定副詞」は、聞き手を取り巻く環境や、世界の変化を防ぐ場合に用いられる。「遂行的否定副詞」は、さらに「不満足」否定副詞と「意志」否定副詞に分けられる。「不満足」否定副詞は、話し手や遂行者の不満を表現し、聞き手に自分の状態を伝えるか、満足できない状況を解決するようしたりする。「意志」否定副詞は、否認したり、禁止・命令をする時、強い意志を表明することによって、聞き手の考えや行動に変化をもたらす。「不満足」否定副詞には、「どうしても／どうも」などを分類した。「意志」否定副詞は、さらに二分し、「強い意志」否定副詞に「けっして／絶対(に)」を、「弱い意志」否定副詞には「とても／どうしても」などを分類した。

第二節では各副詞の分析を行った。データとして収集した日本語副詞の全体様相を〔表2〕に示した。〔表2〕で「非常識」「無理」などのような「語彙的否定」といわれるものは「肯定表現を伴う場合」に入れた。

[表 2] 日本語副詞の収集した用例の全体様相

副詞	肯定表現を伴う場合			否定表現を伴う場合			合計
	会話文	地の文	小計	会話文	地の文	小計	
あまり	20	27	47 (8%)	203	348	551 (92%)	598
一向に	-	1	1 (2%)	6	57	63 (98%)	64
けっして	-	-	-	69 (24%)	216 (76%)	285 (100%)	285
ぜんぜん	73	29	102 (21%)	256	136	392 (79%)	494
ちっとも	1	0	1 (1%)	51	44	95 (99%)	96
どうしても	56	65	121 (45%)	58	89	147 (55%)	268
とうてい	1	3	4 (9%)	9	32	41 (91%)	45
とても	233	386	619 (80%)	61	90	151 (20%)	770
なかなか	69	65	134 (34%)	122	143	265 (66%)	399

次に、日本語の副詞について「なかなか」、「とうてい」、「ぜんぜん」、「一向に」、「ちっとも」、「あまり」、「どうしても」、「けっして」、「とても」の順に考察を行った。共起制限については、先行研究を参考にした。

「なかなか」は、先行研究において否定表現と共起することにふれた研究もあるが、ほとんどの研究が程度副詞としている。先行研究における、「なかなか」の意味・用法は「程度」「予想」「評価」の三つの視点が欠かせないと思われる。

共起関係については、肯定表現を伴う場合より、否定表現を伴う場合が多くみられ、述語との共起関係は動詞述語との共起が目立った(246例(93%))。動詞述語との共起例の内、98例(32%)が不可能形との共起であった。「なかなか」が動詞述語と共起する場合、事柄の可能性や実現、変化及び状態性を意味として持つ動詞を選ぶ。ゆえに、多くの動詞述語は可能形あるいは「～ている」形に置き換えることができる。また、「なかなか」は、「形容詞+ない」「形容動詞+ではない」構文で共起制限をもつ。形容詞はすでに実現された状態性を表すため、話し手の不可能に対する判断はあり得ないため共起に制限ともつのである。形容動詞も形容詞同様、すでに実現された状態性を表す語であるためこれから実現を願う「なかなか」となじまない。また、主体の状態を表す「動詞+ていない」という構文は、動作の不遂行状態の実現で実現を願う意図はないため、「なかなか」と共起できない。

「なかなか」は、可能性が低いことを表す副詞である。ただし、可能性が低いということは、可能性が残っていることにもなる。「なかなか」は、「ある事態が起こることは難し



い状況にある」ということを前提とし、難しい状況の中でも可能性がゼロではないこと、つまり起こる余地はあることを強調する。日韓の翻訳書において、「なかなか」が最も多く対応した韓国語の副詞は「좀처럼 *jomcheoreom*」で、133例(約51%)が見られた。

「とうてい」は、先行研究で「可能性」という側面から述べられた。共起関係については、否定表現を伴う場合が圧倒的で、肯定表現を伴う場合の4例はすべて「無理」という語と共起した。否定表現を伴う場合は、地の文に多く現れ、動詞述語文(31例(76%))との共起が目立ち、19例(42%)が不可能表現と共起した。また、「とうてい」は「形容詞+ない」構文で共起制限をみせる。これは「ものごとの属性や状態を表すのが形容詞で、属性とはそのものにすでに備えている固有の性質を表す。従って、「ある事態が実現される可能性がないこと、無理である」ことを表す「とうてい」とは共起できない。

「とうてい」は、話し手が述べる状況や事態などを遂行する者の能力に対して言及し、その事態・状況の遂行が、遂行者ができる能力の外にあること、つまり、遂行する者の心理、能力、あるいは状況に、ある事態が実現される<可能性がないこと・無理であること>を表すことで否定の内容を強調する。「とうてい」は不可能の意味を持つが、結果的に不可能(事態・状況の遂行が失敗した)であったが、そのために努力はしたことを表す。これは「～では」という表現とよく使われ、「そのような手段/場所/基準/状況」などの条件では、不可能であることを表す。他にも「～(ない)と、～(なけれ)ば」などの表現とよく使われ、このような条件の元では実現が無理であることを表し、「～なんて/～とは」などの予想外の状況を表す表現とも使われている。日・韓翻訳書においては、「도저히 *dojeohi*」との対応が著しかった。

「ぜんぜん」は、先行研究に、否定表現と共起する用法を本来の用法とするもの、「ぜんぜん+肯定形」は従来から存在した用法であるとするもの、「ぜんぜん+肯定形」の形式は揺れに見えるが実際はそうでない可能性が高いとするもの、「全然～ない」用法は核として存在し、否定的意味を含む語の後続も許容するようになったとするものなど、明治から現代にかけての様々な研究がある。共起関係については、否定表現を伴う場合が肯定表現との共起より多くみられ、地の文より会話文(65%)でよく使われた。共起関係については動詞述語との共起が一番多く、224例(57%)あった。共起する動詞のうち、知覚動詞や、変化を表すものと、不可能形で使われたものが多くみられた。共起制限については、「名詞は+で(は)ない」構文では共起しにくい。この場合、名詞に程度性が認められたら共起可能となる。また、「禁止命令」表現と共起できない。はたらきかける叙法と共起するのは、「現状より程度量が増加することを表しうるような(もっと、もう少し)副詞であるとされ、「ぜんぜん」が表すのは二者択一の事態であり、程度量の増加とは全く関係ないため「禁止命

令」表現と共起できないのである。また、先行研究で指摘されているように、「ぜんぜん」は、前提を必要とする用法があり、先行している文脈の意味を打ち消す働きをもち、前提されている程度を強調する用法もある。「ぜんぜん」は不可能形と使われ、可能性がゼロであることや、肯定の余地を残さず、「完全に」の意味を表す。日・韓翻訳書では、韓国語副詞「전혀 jeonhyeo」に対応する例が一番多かった。

「一向に」は、先行研究では、時間や手間をかけて全然の意味で、事態が違う段階に移行するのを前提としていて、否定の述語と共起することによって他の段階に移行できない状況を表すものとされる。共起関係については、動詞述語との共起が一番多くみられる(46例(73%))。共起する述語は性質によって、2種が認められる。一つは、程度性を表す語(気にしない、気にならない、安全ではない、など)と、もう一つは変化を表す語(始まらない、上がらない、思い出せないなど)である。「一向に」の場合は、不可能形との共起例は4例しかなかった。「名詞～ではない」が来る場合と、「文+わけ/こと/の」が来る場合は「一向に」が現れにくい。

「一向に」は事態の他の段階への移行を前提にした発想である。従って否定が来ると他の段階へと変わらない状況を表す。しかし、「名詞ではない」、「～わけ(こと/の)ではない」構文は、話し手によって事態に対する論理的な思考の産物としての否定的断定を表す表現である。つまり、否定的な断定そのものは瞬時的なもので、他の方向に移行を願うという時間の幅のある「一向に」は意味的な影響を与えることができない。日・韓翻訳書においては、「전혀 jeonhyeo」との対応が多く見られた。

「ちっとも」は、先行研究では考えられる目算や期待や全体量がそこに前提としてある。その中のちっとはあるだろう、すこしぐらい～だろうという自他の期待や問いかけに対して「その少しも、ちょっとさえ～ない」という全面的な否定とされる。共起関係については、動詞述語との共起が一番多くみられ、62例(65%)である。意外性を表す「～なんて/～なんか」や、予想外の状況に接した驚きを表す「～とは」、「知らない/変わらない」との表現が使われて程度を表す場合もある。「ちっとも」は「名詞～ではない」と共起できない。この場合、名詞の程度性が問題となる。程度性とは関連する属性をどれほどもっているかによって対象の順序が決められる属性で、「ちっとも」の場合、程度性をもつ語と共起できる。

「ちっとも」は、変化の可能性のあることにたいして、期待していたが、望ましいと思われるようには変わらないことを強調する、つまり、肯定の余地(可能性)を残さないものである。日・韓翻訳書においては、「전혀 jeonhyeo」との対応が一番多く見られた。

「あまり」は、先行研究において、程度がはなはだしくない様子を表すもので典型的な

部分否定（一部肯定）とされる。共起関係については、様々な意味の側面をもつ動詞と共起して、「程度」、「変化」を表したりする。共起制限については、程度性を表さない「形容詞類十ではない」構文では共起できないと思われる。「あまり」は、形容詞の表す状態に程度性が付加されうる要素を有している必要がある。「同じ／いっぱい／真っ暗」のような語は、極限の状態を表していて、程度性の序列になじまないために非文になるのである。つまり、程度性を考えられない二者択一の状況では使えない。また、程度性をもたない名詞との共起も難しい。「あまり」は「程度」が高くないという意味で、状態や能力、程度が平均以下であることを表す。日韓翻訳書における「あまり」は「별로 byeo1lo(別に)」との対応がもっとも多く見られた。

以上、事実確認的否定副詞について述べてきた。意味による分類からわかるように、「不可能」「程度」という側面が、共起関係や共起制限にも表れた。「ぜんぜん」は「不可能」否定副詞として使われる場合や「可能性」の余地を残さない意味での「強い程度」否定副詞としても使われる。

以下では、遂行的否定副詞についてみていくことにする。

「どうしても」は、先行研究においては、動作主体の意図や期待に反する出来事が「思う通りにならないことを描写し、「どんなに努力しても、いくら事態の実現を願う意志があっても実現しないこと」を強調するものとされる。共起関係については、動詞述語 138 例のうち、「不可能形」との共起は 71 例（51%）が見られた。共起制限については、「命令・決意といった意欲文のタイプには用いられず、命令形や意志形と共起するとしてもそれは間接引用的な場合に限られ、聞き手を前提にした、承諾や申出、あるいは要求文的な文に「どうしても」はつかうことはできないとされる。

「どうしても」は、話し手や会話の主体があることを行うことにおいて、満身に思えないと感じる場合使われ、意味としては「いくらやってみても、いくら努力しても」結果的には失敗か、話し手の予想や期待に反したことを表す。日・韓翻訳書において「どうしても」は「아무래도 amuraedo」との対応が一番多く見られた。

「けっして」は、先行研究で、態度の誘導副詞とされるもので、何か前提があっても、そうではない／そうはしない／そうはならない」という話し手の強い打消し意志を表すとされている。共起については、動詞述語及び名詞述語との共起が多く見られ、文末の表現も「～つもりはない」、禁止の「～てはいけない／～てはならない／（ないで）ください」などと共起する。共起制限については、「わかる、できる、聞こえる」など、「に」格をとる動詞だが、「に」格に話し手自信が来る場合、これら動詞の否定形と「けっして」とは共起しないとしている。先行研究では許容されない文である理由を「わからない、できない、

聞こえない」のような表現は話し手が、話し手自身のこととして断定するときには使われないからだとして述べられていない。

「けっして」は、話し手の発話内容に対する否定的意志、または否定的な判断を表す。「わかる、聞こえる、できる」などは無意志的な状態の変化を表し、自発性がある。「けっして」が「わからない」と共起し、非文になるのは、「わからない」が非意志的な状態の変化を表し自発性があり、認識や理解の否定(不能)を表す語であるため、話し手の否定的な意志を表したり、話し手の判断を表したりする「けっして」とはなじまないことによる。同様のことが「できる」についてもいえる。「できる」も無意志的な語で、否定形である「できない」も、遂行者の能力がある事件・状況を成立させるために必要な能力に及ばない場合と、その事件・状況を成り立たせるのに遂行者の能力は十分だが、条件つまり状況や都合などのために遂行することができないことを表し、話し手の意志とは無関係である。「けっして」は、ある事実や行為に対して、確信を持って、絶対に認定・容認をしないことの強い意志を表す。相手の「そういう推測の仕方」、「そういう論理の立て方」に対しての否定を示す。「そういうふうに、そういう姿勢で、そういう立場で、そういう考え方をしないでほしい」ということを相手に伝える表現である。「～つもりはない」といった意志の否定形、逆接表現などと使われる。あることが叶う、実行される程度や頻度が低いことに対して、ある程度の前提を意識しているため、望ましい行動や状態を相手に勧めたり、忠告したりする場合に使われる。「～ては」と使われ、示された条件のもとでは望ましくない結果となる意味を表し、その事態をさけるべきだということを示す。

「とても」は、先行研究では共起する述語によって、動詞述語と共起する場合は陳述副詞とし、形容詞、及び状態性動詞と共起すると程度副詞とする見解が見られた。また、話し手自らの意志を示すことにより実現の可能性を否定する、つまり非実現を表すとされている。共起例は、「不可能」の場合が、101例(67%)が見られた。「とても」は「～では」という表現とよく使われ、「そのような手段／基準／状況」などの条件では、不可能であることを表す。他にも「～(ない)と、～(なけれ)ば」などの表現とよく使われ、このような条件の元では実現が無理であることを表し、「～なんて／～とは」などの予想外の状況を表す表現とも使われている。

また、「とても」には、話し手や遂行者も記述する事態を起こす意図があり、望む事態を起せる能力とそういう状況にあるにもかかわらず、自らあきらめること、つまり、意志を捨てることを表す。「弱い」意志を表わす場合の「とても」と「どうしても」は、「哀れ」「寂しい」「名残おいしい」「残念で物足りなく思う」などの感情が含まれているため、相手に対する配慮が感じられる。

以上、遂行的否定副詞についてみてきた。前述したように、遂行的否定副詞の中でも、事実確認的否定副詞のうち、「不可能」否定副詞と連続性があると思われる語もある。

また、「J→K」において翻訳書における副詞の対応関係は、大きく副詞と対応している場合と副詞と対応していない場合とに二分することができる。副詞と対応している場合は、日本語の副詞と韓国語の副詞が1:1の対応を見せる場合である。副詞と対応していない場合を、「再構成 (restructuring)」とし、3つのタイプに分けた。「再構成」には、まず、原書から「副詞」だけが訳されない場合がある。この場合を「副詞省略型」とした。次に、副詞として訳されていないが、副詞の役割を担っていると考えられる句レベルで、意味が通じるように訳した場合である。この場合を「説明型」とした。最後に、訳者が文脈に依存して全く異なる形式に変える場合である。これを「意識型」とした。日本語副詞の「再構成」の用例は、全部で350例が見られた。タイプ別の内訳は、「副詞省略型」が178例(51%)、「説明型」が82例(23%)、「意識型」の場合は90例(26%)が見られた。

### 3. 4 第4章 辞書類・翻訳書における類義関係にある日・韓否定副詞の対照

第4章では、否定表現における副詞の日・韓対照研究は、意味や用法に対照の重点においたものは少なく、形態的な対応関係を羅列するに留まっているものがほとんどである。第4章の考察に入る前に、副詞ごとに対応する語が多岐にわたっているため、翻訳書での対応様相と、辞書類における説明語を調べた。まず、翻訳書(J→K)における対応様相から、各副詞における対応語の頻度順2位まで選び、日・韓辞書における日本語副詞の韓国語説明語(〔表3〕)、韓・日辞書における韓国語副詞の日本語説明語(〔表4〕)を参考に、①「あまり」と「별로 byello(別に)／그다지 geudaji(あまり)」、②「なかなか」と「좀처럼 jom cheoreom(なかなか)」、③「とても／どうしても／とうてい」と「도저히 dojeohi(とうてい)」、④「一向に／どうも／どうしても／とても／ぜんぜん」と「도무지 domuji(まったく)」、⑤「一向に／ぜんぜん／ちっとも」と「전혀 jeonhyeo(ぜんぜん)」、⑥「どうしても／とうてい／どうも／とても」と「아무래도 amuraedo」について、⑦「けっして」と「결코 gyeolko」について対照を行うことにした。

〔表3〕 日・韓辞書における日本語副詞の韓国語説明語

日本語の副詞	韓国語副詞
一向に/ぜんぜん/ちっとも	조금도 jogeumdo (少しも)
一向に/ぜんぜん/ちっとも	전연 jeonnyeon (ぜんぜん)
一向に/ぜんぜん/ちっとも	전혀 jeonhyeo (ぜんぜん)
どうてい/とても/なかなか	도저히 dojeohi (どうてい)
どうしても/どうてい/とても	아무래도 amuraedo (どうしても)

〔表4〕韓・日辞書における韓国語副詞の日本語説明語

韓国語副詞	日本語副詞
전연 jeonnyeon (ぜんぜん)	皆目/さっぱり/ぜんぜん/てんで/まったく/まるっきり/まるで
전혀 jeonhyeo (ぜんぜん)	皆目/完全に/さっぱり/さっぱり/少しも/ぜんぜん/ちっとも/てんで/到底/とても/何も/一つも/全く/まるっきり/まるで
도저히 dojeohi (どうてい)	どうしても/到底/とても
아무래도 amuraedo (どうしても)	どうあっても/どうしても/どうにも/どうみても/何としても
도무지 domuji (まったく)	一向に/皆目/さっぱり/ぜんぜん/ちっとも/どうしても/到底/どうも/とんと/まったく/まるっきり

まず、「あまり」と「별로 byeollo/그다지 geudaji」についてみると、肯定表現と否定表現に現れる語は「あまり」と「별로 byeollo」である。「그다지 geudaji」は否定表現のみにて現れる。「별로 byeollo」は、記述する行為や状況などがまれに起きたり、起きた程度が弱いことを表す。「그다지 geudaji」は、ある状態の程度がそれほどひどくないことを表し、意味的には「弱い程度」の否定副詞にあたる。さらに、「별로 byeollo」は、単独で使うことができるが、「그다지 geudaji」は単独で使えない。単独で使えるかどうかに関しては「あまり」と「그다지 geudaji」が類似している。

次に、「なかなか」と「좀처럼 jimcheoreom」についてみてみよう。「좀처럼 jimcheoreom」は、不可能表現と共起し、話し手がある事態の発生する確率が低いと判断した場合に用いられ、事態が容易には話し手の意図や予想通り起きないことを表す。主に動詞述語との共起を見せる点では、「좀처럼 jimcheoreom」は「なかなか」と類似している。しかし、「なかなか」には、頻度の意味はあまり無いが、「좀처럼 jimcheoreom」には「めったに～ない」という頻度の意味を含んでいる。そのため、形容詞「드물다 deumulda (まれだ)」との共起

が目立つ。「ある事態が起こることは難しい状況にある」ことを前提とする「なかなか」と「話し手がある事態の発生する確率が低いと判断する」という「좀처럼 jimcheoreom」は、「不可能」否定副詞に分類される。

次に、「とても／どうしても／とうてい」と「도저히 dojeohi (とうてい)」について述べることにする。「도저히 dojeohi」は、ある事態が全面的に不可能であることを表わし、可能性に対する完全な排除を表す完全否定の意味を持つ。「도저히 dojeohi」は、不可能を表わす「~ㄴ 수(가) 없다(することができない)」と共起し、外部の原因あるいは能力による不可能を表わす「못(できない)」、出来事が起こる可能性が少ないことを表す「것 같지 않다 (~そうにない)」との共起現象が見られた。「도저히 dojeohi」は単純に話し手が記述する事件・状況を遂行する能力がないことについて言及し、「不可能」否定副詞に分類できる。また、「도저히 dojeohi」も「とても／とうてい」と同様、「~로는 roneun (~では)」という表現とよく使われ、「そのような状況」の元では不可能であることを表す。「とても」は実現の可能性が無理であることを表し、「不可能」否定副詞に分類される。その他に、望む事態を起こせる能力とそういう状況にあるにもかかわらず、自らあきらめること、つまり意志を捨て「弱い」意志を表す場合も用いられる。「どうしても」は「いくらやってみても、いくら努力しても」結果的に失敗か、話し手の予想や期待に反しているため「不満足」否定副詞に分類される。「不可能」否定副詞であるという点で「도저히 dojeohi」と「とても／とうてい」が類似している。

次に、「一向に／どうしても／とても／ぜんぜん」と「도무지 domuji (まったく)」について述べよう。「도무지 domuji」は、二者択一の事態で話者の考え、判断が相反する場合を表わし、話し手が望む状況になるための十分な努力が含まれる。可能性の意味に加え認識の意味を持つため、「이해할 수 없다(理解できない)」、「모르다(知らない／分からない)」などの表現と共起する。二者択一の事態で用いられる点で「ぜんぜん」と類似している。「도무지 domuji」は程度性とはかかわりを持たないため、程度性と関わりを持つ「一向に」とは異なる。不可能性と関わりを持つという面からは「一向に／どうしても／とても／ぜんぜん」と「도무지 domuji」は類似している。

次に「一向に／ぜんぜん／ちっとも」と「전혀 jeonhyeo (ぜんぜん)」についてみると、「전혀 jeonhyeo」は、否定の程度を強調し、他の段階への移行を前提としていて、「少しも、一つも」という意味で使われたり、話し手が予測したり意図したことと「完全に」相反する場合使われたりする。「전혀 jeonhyeo」は肯定表現でも共起できる。肯定表現との共起について見てみると、「全然」は「明治時代以降に用例が見られるようになる語であるが、当初から肯定表現においても、否定表現においても用いられている。一方、

「전혀 jeonhyeo」は、中世語に肯定文と共起している例が見られるとしながらも、現代では肯定文との共起について世代間でゆれが見られ、若い世代では「전혀 jeonhyeo」の肯定文との共起を非文に近いものと認識されていると指摘されている。

肯定の余地を残さないという点では、「一向に／ぜんぜん／ちっとも」と「전혀 jeonhyeo」は類似している。

次に、「どうしても／とうてい／とても」と「아무래도 amuraedo(どうしても)」について述べると、「아무래도 amuraedo」は、「とても」(約 81%)と同様、否定表現を伴う場合よりも肯定表現を伴う場合が多く見られた(約 70%)。「いくら頑張っても」実現を願う意志があっても実現しないという点では「どうしても」に類似している。日・韓辞書においては「아무래도 amuraedo」は「とうてい」に対応するとされているが、韓・日辞書と韓日翻訳書においては「とうてい」との対応は見られず、「どうしても」との対応が多く見られた。「아무래도 amuraedo」が「とても」と訳されたのは「わからない」という語が後に続く場合であった。「わからない」は、認識や理解の否定、つまり、不能を表す語である。「わからない」ということは、話し手や遂行者のコントロールのできない精神領域の外に存在するため、「いくら能力しても」不可能であることを表している。

最後に、「けっして」と「결코 gyeolko(けっして)」について、述べることにする。「결코 gyeolko」は、「けっして」と同様、否定表現を伴う場合にのみ現れ、話し手がある事態に対する強い確信を表す場合、強調して、否定したり、ほかの人の行為を禁止させる場合などに使われる語である。確信を持って絶対に容認しないことの強い意志を表す点で、「けっして」と「결코 gyeolko」は類似している。また、「けっして」は否定的な事態に対する話し手の断言・断定を表すもので、不確かな事実に対する推定や情報の無い事態に対する質問とは使えない。「결코 gyeolko」も同じ制限を持つ。

以上、翻訳書及び辞書類において対応関係にある日・韓両言語について考察を行った。それぞれ極性に違いが見られたり、構文上、あるいは共起する語などにおいて類似点と相違点が見られた。

### 3. 5 第 5 章 結論と課題及び展望

本研究は、否定表現を伴う副詞を対象に、日韓対照の立場から考察を行った。考察の対象となる副詞の共通する意味を「強調性」としたうえで、Austin(1962)の言語行為理論を取り入れ、「事実確認的否定副詞」と「遂行的否定副詞」と分け、これらをさらに「不可能」否定副詞、「程度」否定副詞、「不満足」否定副詞、「意志」否定副詞に細分し考察を行った。



本研究を通して、日・韓両言語において、否定表現を伴う副詞について考察を行ったものの、残されている課題はまだ多くある。

今後の課題を幾つか挙げると、第一に、意味による分類の連続性についてより精密な考察が必要である。第二に、肯定的意味を表わす場合についてより詳細に考察する必要がある。第三に、今回用例を翻訳書から採集したが、翻訳書には訳者によって「副詞」使用に片寄が見られた。訳者によって「副詞」を省略して訳したり、原文が否定文である場合、肯定文に変えて訳したりする場面が見られた。このような現象を避けるために、ネイティブによるアンケート調査などを行って使用の現状を調べてみる必要があると思われる。最後に、研究結果を日本語教育の現場に役立つためには、今後は用例を増やして、有効性の高い副詞に研究対象を広げ、言語形式に現れる使用上の法則や、言語形式に現れないニュアンスなどについて研究を深めていきたい。

より厳密に考察していく予定である。これからはこのような問題を念頭に置きながら、研究を深めていきたい。

第 5 章では、本研究のまとめを行い、本研究の位置づけを行うことで、これからの展望と課題について述べた。

教科書での取り上げ方は、例えば「まっすぐ」が 10 冊に共通して扱われているのも、道を教える場面などに伴って出てきている、日本語教科書特有の語彙であり、日本語学習者にとって、有用性の高い語彙であるかどうかということとは関連性が薄いように思う。(道を尋ねる場面は有用性が高いという配慮はあると思う。

難易度や教科書掲載語彙の面からみて、副詞の指導は初級よりも中級以上が中心となると思われる。しかし、中級の教科書でも、副詞はたまたま載っている語彙に変わらない場合が多い。(注：副詞の学習を目的とした『日本語例文問題シリーズ／副詞』荒竹出版などを除く

それと言うのも、副詞は文成立に必要な絶対的なものではなく、あくまでも修飾語であるからであろう。特に命題内において作用し、情報を付加する副詞以外のものは使用せずに命題内において作用し、情報を付加する副詞以外のものは、使用せずとも文意は伝わり、文法的に破格になるわけでもない。しかし、なぜ副詞を用いるか、用いることにより、何を伝えようとしているかということをお教えると、日本語において副詞の持つ働きは

言語形式に現れた使用上のルールは、学習者にとっても、指導者にとってもそのよりどころとなるはずである。その言語上の制限をしっかりと把握した上で、さらに、副詞に伴うニュアンスも可能な限り学習者に知らせる義務があると思う。文法上の間違いでない限り、指摘されることなく、そのまま使い続ける恐れがあるのだ。日本語教育のどこかの段階で、このような観点からの指導を行う必要がある。それには、どんな場合にどんなニュアンスが伴うか、それはなぜか、といった日本語そのものの基礎的研究が必要である。大量の用例を集め、観点を定めての分析がその第一歩であろう。今後、本研究で取り上げなかった副詞に対象を広げ、研究を続けていきたい。

日韓両言語における副詞をそれぞれ 9 語を選んだ。

以上が本研究の概要である。

個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明確に記述することである。考察の対象とした語は日本語の副詞 9 語と、それに対応する韓国語の副詞 9 語である。詳しくは以下の語である。

日本語の副詞のうち、辞書間でその意味記述に互いの語がメタ言語として使用され<sup>1</sup>、類義関係にある 10 語を選び、その日本語と同じ現象が見られる韓国語の副詞、10 語を分析対象とした。両言語、それぞれ 10 語の副詞は以下のものである。

さらに、その結果に基づいて韓国語の副詞と対照研究を行い、日韓両言語の非母語話者日本語と韓国語の類似点と相違点を明らかにする。また、その結果を「教育」という観点

---

<sup>1</sup> 【資料 1】を参照。

に結び付け、考察する。

#### 研究の背景

第2章では、最初に、本研究の重要な枠組みで「否定表現」の概観を行った。次に、従来否定極性副詞と言われてきた「否定表現を伴う副詞」について概観し、これまでの先行研究をまとめ、その成果と課題を踏まえた上で、本研究の具体的な研究課題を明記した。

ある対照研究、談話研究、理論の概観を行った。次に、「」に稿は、副詞の持つ複雑な性質の一要因として考えられる「連続性」について、「プロトタイプに基づくカテゴリー化」理論の立場から検討したものである。具体的には、「副詞の分類」に注目し、「早(速)く」と「急いで」の類義語分析を通して、その「連続性」を明らかにした。つまり、「早く」と「急いで」は「(典型的な) 様態副詞」と「時間関係の副詞」の両方の性質を持ちつつ、語によってはその一方の性質をより強く持つという「連続的な性質」を持っているということである。

また、「早く」と「急いで」の類似点・相違点についても明らかにした。

第1章で先行研究を見る。その視点としては、

第2章では、第1章の先行研究を踏まえて目的の確認をし、その目的のためにどのような調査対象にどのような項目を要旨、どのような方法で行うかの概要を述べる。

第3章では、まずデータとして調査結果の全体を挙げ、その上でそれおれに考察解釈を加えたい。また、ここで先行研究と比較し異同を見ることで、第4章での深い考察へとつながるよう施したい。

第4章は、データを総合的に見、先行研究との比較も踏まえて、どのような言語生活の状況がみられるか記述する。

第5章に小論のまとめとし、小論の位置づけを行うことで、これからの展望も述べ、結びたい。

제 4 장에서는 한국어와 영어의 공손 표현의 공통점과 차이점에 중점을 두어 한국어 교육에서 유의해야 할 부분과 그 교육 방안에 대하여 제시하였다.

本研究は日本語学習者を調査して類義語教育の必要性を提示し、現在日本語教育で扱われている類義を収集し、その様相を調べて効果的な類義語教育のために類義語の意味差を明瞭に説明できる基準を提示することを目的とする。

第1章では、類義語教育の必要性を提示し、本研究と関連する先行研究を検討し、本研究

の目的を明らかにした。

第2章では、本研究で扱う内容と関わる理論 概念、